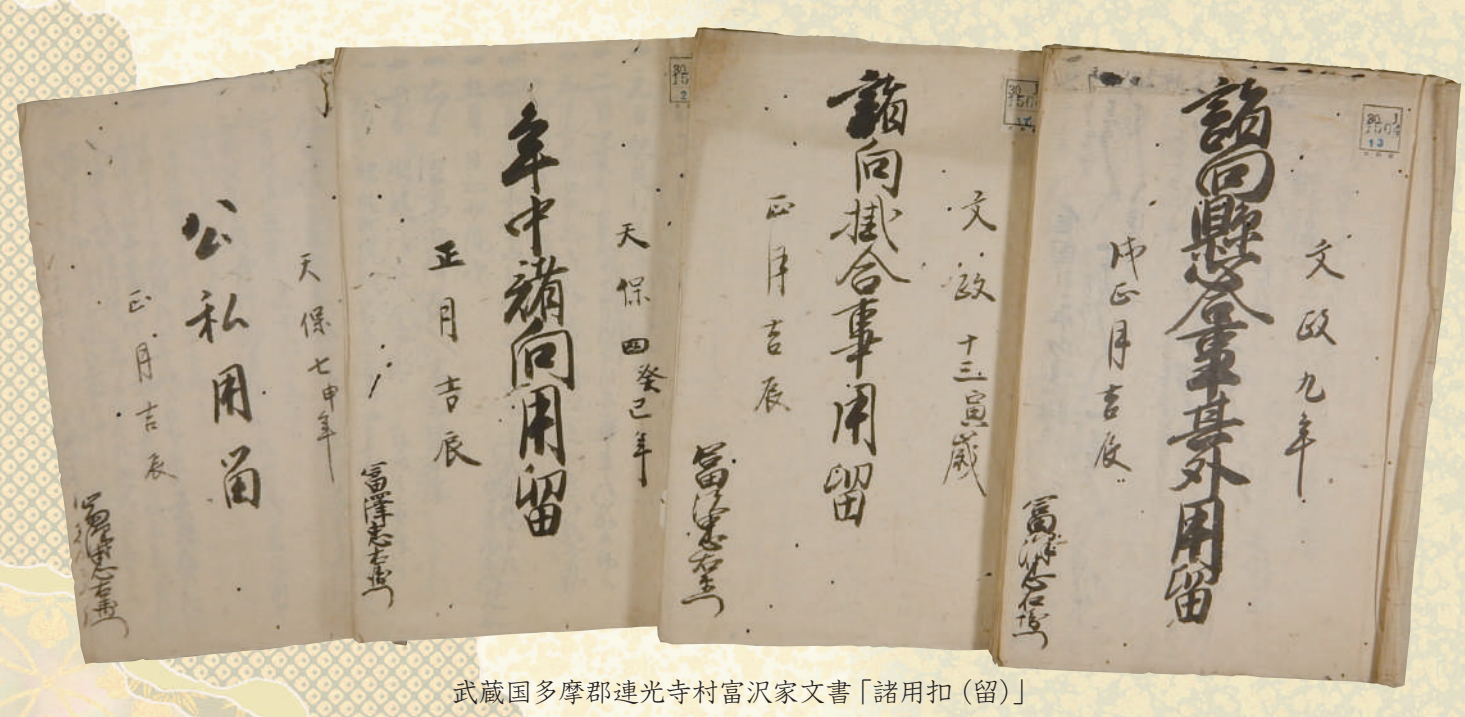
ISSN-1883-1931

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニューズ

No.50　WINTER 2018



武蔵国多摩郡連光寺村富沢家文書「諸用扣（留）」

目　次

メッセージ

平安時代人の散歩―国際化と辞書― …… 坂本　信道　1

研究ノート

明治27年の長塚村大字渋川の人びと
　―原発事故帰還困難区域の歴史資料を読む― …… 西村　慎太郎　2

平田国学と和歌 …… 三ツ松　誠　4

書評

ブックレット〈書物をひらく〉2
　入口敦志著『漢字・カタカナ・ひらがな　表記の思想』 …… 鈴木　喬　6

ブックレット〈書物をひらく〉5
　恋田知子著『異界へいざなう女　絵巻・奈良絵本をひもとく』 …… 柏原　康人　7

トピックス

「ないじぇる芸術共創ラボ　NIJL Arts Initiative」について …… 小山　順子　8

第10回日本古典文学学術賞受賞者発表 …… 9

第10回日本古典文学学術賞選考講評 …… 中川　博夫，小林　健二　9

バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書群の調査と活用
　ローマでのくずし字講座と講演会の開催について …… 三野　行徳　11

大学共同利用機関シンポジウム2017
　「研究者に会いに行こう！―大学共同利用機関博覧会―」 …… 有澤　知世　12

平成29年度「古典の日」講演会 …… 恋田　知子　12

第41回国際日本文学研究集会 …… 荒木　優也　13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況 …… 14

平安時代人の散歩―国際化と辞書―

坂本　信道（国文学研究資料館国際連携委員会委員、京都女子大学教授）

国際化が好きである。私が、ではなく、世間が日本国が、である。海外の日本文学研究事情にもっとも魯鈍な人の群に属すると思われる私にまで、国文学研究資料館の国際連携委員の仕事が回ってくるのだから、その猛威たるや凄まじい。こうべを廻らすと、いずこも国と日本のせめぎ合いだ。ちなみに私は国文学科の所属である。

2017年の秋、国文学研究資料館で行われた作家多和田葉子氏と、ロバート キャンベル館長の対談の中で、近著『百年の散歩』(2017.3)にからむかたちで「散歩」が話題にのぼった。日本語を母語とする小説家であり、同時にドイツ語でも文章を書く多和田氏が語った、異言語体験――日本語のベルリンからはなにやらかわいらしい、りんりんと鈴のようなイメージ、ドイツ語でBerlinと聴くと熊（der Bär 市の紋章も熊）のちょっといかつい印象を受ける――などは、複数言語に携わる者の壮絶な「引き裂かれ」の苦悶の一端のように思われる。「散歩」についても、日本でののんびりのどかな散策と、人類の歴史をつい考えさせられてしまうベルリンでの散歩（市街のいたるところに第二次世界大戦の死者のメモリーがある）の違いが、小説を書くにあたってどのように作用するか、といった話であった。

異言語間におけるこうした違和感、つまり別の言語へ置き換えてみた時の非忠実さ・不正確さは、国際的な文学研究に乗り出した者の誰もが必ず突き当たる壁である。しかし、さらに事態がやっかいなのは、「古語」で書かれた作品を扱う研究の場合だ。

現代日本語やドイツ語を母語とする人たちは、「散歩する」（気晴らしや健康のために、ぶらぶら歩くこと。散策。『広辞苑』）ことが、ごくあたりまえに出来るだろう。しかし、平安時代の人には、いわゆる「散歩」は出来まい。理由は単純、その語がないからだ。似たことばならある。「逍遙」である。『万葉集』から見え、『源氏物語』など平安期にも用例多数。「気のむくままにあちこちと遊び歩くこと。そぞろ歩き。散歩。」（『日本国語大辞典』第二版）、「心を慰めて遊ぶこと。また、思いに任せて、あちこち遊び歩くこと。ぶらぶら歩き」（『古語大辞典』小学館）といった辞書の記述に導かれると、「散歩＝逍遙」と解しかねないが、逍遙の実態は現代の散歩とはまるで異なっている。ルソー『孤独な散歩者の夢想』、あるいは社会正義のための犯罪を瞑想するラスコーリニコフがサンクトペテルブルク市内を歩き回る『罪と罰』など、海外作品の「散歩」から得る印象、思索に耽りながら孤独に、ひとりで歩き回る散歩ではない。平安時代の逍遙は、集団で行う漫遊、すなわち "excursion/ a short journey, often one made by a number of people together for pleasure"（『新英英大辞典』開拓社）である。自然の中をひとりで歩きながら静かに物思いに耽る「散歩」という状況など、平安時代の人にとって「逍遙」の語からは想像できないことがらだ。同じ日本語ながら、懸隔はあまりに大きい。

いま仮に、英語を母語とする日本古典文学研究初学者の研究手順を想像するに、「古典文学作品（古代日本語）→注釈書または古語辞典（その説明はいずれも現代日本語）→（和英辞典を経て）英語」と見るのが穏当であろう。先に挙げた「逍遙＝散歩」のような誤解が生じる可能性を低くするためには、古代日本語から直接英語へという辞書（理想的にはその逆も）がなんといっても必須だ。しかし、そうした辞書を手にすることは出来ない。もっとも基本となる二言語間の辞書「古代日本語－英語」の整備すらなされていないというのが、国際化の現状を象徴している気がする。

ずいぶん前だが、マーク・ピーターセン氏が『辞書を語る』（岩波新書 1992）の中で、「忘れてはならないのは、アメリカの出版社はちゃんとした和英・英和辞典を作っていない点である」と言っていた。氏は日本の出版社の和英・英和辞典で勉強したわけだ。その点、英語学習による国際化のお膳立てをやってのけた日本の出版界や教育研究界は誇ってよいと思う。が、日本古典文学研究の国際化が唱えられる今、われわれには耳の痛い話ではないか。英語とは違い、商業ベースにはまず乗らない「古代日本語 - 外国語」の辞書であっても、信頼できるものを整備していかなければ、当面の国際化はもちろん、海外における日本文学研究の今後の充実などとうてい望むべくもない。電子辞書というかたちを取れば、従来とはまったく異なるスタイル、かつ低コストで、海外の日本語学習者や日本文学研究者に提供するチャンスが来たのではないかと思っている。

京都の「英語が使える」バーで非団体ツアー来日客あまたに尋ねたところ、知られているのはほとんど近代文学か古典芸能だった。そこで挙がったものは、国文学科の学生が口にする作家・作品（知識）とはほぼ完全に「一致しない」。受験勉強や大学での専門教育と国際化は、いすかのはしのくひちがひ、なのだった。これも問題なのかもしれない。

明治27年の長塚村大字渋川の人びと

－原発事故帰還困難区域の歴史資料を読む－

西村　慎太郎（国文学研究資料館准教授）

大規模災害による被害の中でどのように文化資源の保全を行うか、具体的には、被災した文書（公文書・民間所在資料を問わず）をどのように保全するかという課題を当館のアーカイブズ研究の教員は展開してきた。さらに、2017年度からは人間文化研究機構広領域型基幹研究プロジェクト『日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化再構築』における当館ユニット「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究」（研究代表者　渡辺浩一当館教授）をスタートさせた。この研究プロジェクトの中で、筆者は、福島県の帰還困難区域を中心とした地域における歴史資料の救出・保全を、アーカイブズ学的な視角を踏まえて、地域持続・地域貢献に結び付けていく方法の創出を目指している。救出した歴史資料を活かすため、地域住民や研究者などが利用できるように歴史資料の資源共有化を行うことは当然ながら、地域歴史資料を利用した歴史研究を、地域貢献・地域持続に直接結びつけるという視角だ。

2017年9月2日、この研究成果を地域へ還元するため「地域歴史資料救出の先へ」というシンポジウムを開催した。この内容は人間文化研究機構のブックレットとして、今年度末に刊行予定であるが、本稿では、シンポジウムの内容の中からブックレットで詳述できなかった福島県双葉町渋川地区廣田家文書について述べてみたい。

双葉町渋川地区は、南北を丘陵地に囲まれ、北の丘陵地を渋川が流れており、北の丘陵沿いに住居、地区の真ん中を流れる渋川流域に水田が広がる地域である。近隣の寺沢地区仲禅寺十一面観音の胎内仏（康永2年、1343年）に「渋川妻内方」と記されており、その頃には渋川の名称が用いられていたものと思われる。正保郷帳によれば、田方325石余・畑方73石余と記されており、いわゆる「田勝ち」の地域であった。しかし、近世・近代について、『双葉町史』や『長塚村郷土誌』による限られた記述を除いては渋川の歴史像は判然としない。現在、渋川地区は福島第一原子力発電所事故によって帰還困難区域に指定されており、本稿執筆段階での空間線量は0.458μSv/hである（2017年11月15日渋川公民館。原子力規制委員会「放射線モニタリング情報」による）。

ここで、双葉町の概要と現状を確認しておきたい。双葉町は、もともと昭和の大合併で1951年に成立した標葉町が、1956年に改称したことにはじまる。カーネーション栽培やダルマなどで有名であったが、福島第一原子力発電所事故によって、町域のほとんどは帰還困難区域に指定されており、町内に人はいない。

なお、2017年10月、福島第一原子力発電所事故で汚染された土壌や廃棄物を貯蔵するため中間貯蔵施設の稼働が始まった。中間貯蔵施設は福島県大熊町・双葉町に跨る地域に建設される。大熊町では、町の土地である79㎢のうち11㎢が中間貯蔵施設となり、今後、町民の居住空間の1/3に当たる空間、すなわち、町民の住居、名産だった梨の農園、熊町小学校や熊町幼稚園などが、原発事故に伴う中間貯蔵施設稼働のために潰されていく。本稿で論じる双葉町には、中間貯蔵施設だけでなく、鎮魂の名を借りた政府のパフォーマンス施設、復興祈念公園が住民の居住空間と農地を潰して造成されることとなっている。

東日本大震災直後で時計が止まった大熊町立熊町小学校

双葉町渋川地区廣田家文書も、当然帰還困難区域の歴史資料である。帰還困難区域の場合、放射能に汚染された物質はGM計数管式サーベメータによる計測で13,000cpm以下のものに制限されている。これは2011年8月29日の原子力安全委員会「避難区域（警戒区域）から退出する際の除染の適切な実施について」を受けて2011年9月16日に日本政府が方針として提示したものである。但し、本稿で提示す

るような文化財・歴史資料は、東京文化財研究所「警戒区域内からの資料の搬出作業マニュアル」において、1,300cpm以下に設定し、より安全に配慮している。特に、本稿で論じる廣田家文書をはじめとして、福島第一原子力発電所事故という人災に被災した地域では、概ねその半分である650cpm以下を基準として、保全や調査を進めてきた。

廣田家文書の場合、2014年3月15日に東北大学大学院生の泉田邦彦氏による廣田家の蔵内資料の線量計測・救出作業が行われ、上記の基準を満たした歴史資料が茨城大学に搬入された。2015年6月20日～22日、茨城史料ネットが中心となって保存処置・撮影が行われた。その後、筆者によって2016年11月7日に廣田家文書1224点の目録が完成した。アーカイブズ学においては、それぞれの歴史資料群に則した階層構造の発見と目録編成を行うが、廣田家文書はすでに所蔵者による物理的な分類（例えば、書状の差出人ごとにビニル袋に入れられて、表にその差出人を記したメモ書きが貼付されているなど）が行なわれており、それを有効に用いて編成を行った（現状記録を用いた目録編成）。

内容は多岐にわたりその目録編成（分類）は既述のブックレットに譲るが、明治時代の廣田家当主・菊治が渋川組頭（いわゆる区長）に在職している最中の文書が多い。本稿では、明治27年（1894）に照射して、渋川地区の様相を明らかにしてみたい（当時は長塚村大字渋川。紙幅の都合上、文書番号は割愛する）。

明治27年は数年来続いている天然痘の流行、度重なる大地震（明治24年の濃尾地震、同27年の庄内地震など）、そして同年夏には日清戦争が開戦し、国内の人びとは疲弊していた。特に、日清戦争では、軍馬不足のため、一般の馬を徴発することとなり、全国から5万6千頭が国家によって奪い取られた（武市銀治郎『富国強馬　ウマからみた近代日本』講談社選書メチエ、1999年）。渋川地区でも、10月5日、徴発のために馬籍の届け出が督促されている。渋川地区の場合、馬籍の届け出を怠るようなこともあったようで、その通達の中に「徴発馬籍之義ハ、所有主ニ於テ異動之都度届出ヘキ筋ニ候処、更ニ其運ビ無之」と記されている。

加えて、福島県は、「旱害・水害・虫害等ヲ各地ニ発セシ」という状況であった（福島県内務部編『福島県稲作景況』）。渋川地区では、前年度の税金未納者が15名に及んでいる（人口は不明だが、幕末の渋川地区は20軒）。このような状況に憂慮した県は、「廿七年度旱災ニ罹リ、無仕付トナリタル稲田ニ対スル地方税地租割ハ、来廿八年度ニ於テ免除可相成」と税金免除を定めた。既述の通り、渋川地区は稲作地域であり、悲惨な状況をうかがうことができよう。

しかし、そのような状況であっても、人びとは逞しく生きた。同年11月21日の通達によれば、「四歳未満ノ馬匹ニ於テハ、其都度届出ヲ怠ルモノ往々有之、調理上差支候ノミナラズ、一朝徴発等ノ場合ニ際シ、不容易不都合ニ付」、馬籍を届け出るよう全戸に伝達するよう記されている。単に、国家権力の圧政に従属するだけでなく、したたかに、馬の徴用を拒否したのであった。

そのように考えた場合、引用した『福島県稲作景況』の自然災害の記述の後の一文、「気候順ニ復シ、駆除又ハ功ヲ奏シ開花、当時ノ景況ニ於テハ非常ノ豊作ヲ呈シ」の部分は注目に値しよう。実際、渋川地区のある福島県標葉郡は前年比3千石以上の豊作となっていることから、渋川地区が「無仕付」となったとは考えにくい。この点については、渋川地区には他のアーカイブズがなく、周辺地域の歴史資料とも合わせて、さらに検討すべき点であるが、国家権力や災害に翻弄されてきただけではない当該地域住民の反骨精神や気概の一端として捉えられるのではないだろうか。

廣田家文書の放射線量測定

平田国学と和歌

三ツ松　誠（佐賀大学地域学歴史文化研究センター講師）

平田国学と和歌。篤胤の読者は少なくないが、あえてこれを問題にする者は多くない[1]。篤胤の和歌には篤胤の和歌なりの魅力があると言われてはいるのだが、飛鳥井雅道は篤胤の歌論『歌道大意』について次のように評しており、筆者も異論を唱える気が起こらない。

> 篤胤は、「あはれ」を知るのには物語が「第一」だとくりかえし語ってはいる。しかし実際に、「源氏物語は長くて句ぎりがむづかしいから伊勢物語を一くさり申しませう」というとき、本音はどうも源氏をわかってはいないんじゃないかと思われる。彼は自分で、歌の素質がないと自認しているし、浄瑠璃、潮来ぶし、臼挽き歌を援用して「まこと」があればすべてよい歌と説いてゆくあたりには、いわゆる『歌道』をはみだした篤胤の暮らしぶりが浮んでいるのである。（中略）彼は「やさしくて面白い」歌と、俗なものを次の二首で区別する。
>
> 「逢て話は山々有れど、まさか顔見りや口へ出ぬ」
>
> 「ゆんべ来たのを猫ぢやとおシやる、ねこが下駄はいて来るものか」
>
> わたしのとまどいは、一時期絶望に近くなった。

ただし彼はその後、篤胤全集を読み返すことで、「江戸の文化・文政の町人社会の中で、なりふりかまわず日常生活を論理化しなければいられない精神」を篤胤の中に見出すことで、「親近感すらいだくよう」になったという[2]。雅道は絶望に近い戸惑いを抑えて篤胤に向き合い直した結果、当初の印象とは別の観方で篤胤を評価できるようになったわけだ。

しかし篤胤と同時代の堂上歌人であれば、『歌道大意』を読み返すような事態にはならなかったはずである。先に見たような実力にして「歌を詠み文を作りて古をしたひ好む輩は、たゞ風流のすぢにのみまつはれて、道のことをばうちすてゝ更に心にかくることなければ、万づに古へをしたひてふるき衣服調度などをよろこび古き書を好み読む類なども、みな風流のための玩物にするのみ也、抑々人としてはいかなる者も人の道知らでは有べからず」[3]と言ってのけるという内容上の問題はさておいても、そもそも『歌道大意』は近世段階では刊行すらされていないのである。

一般に、篤胤は文化八年頃から『古道大意』などの諸講本を生み出したと言われている。しかし実際に篤胤が残したのは講釈の原稿であり、篤胤自身が乏しい資財をそれらの刊行に注ぎこむことはなかった。篤胤の死後に養嗣子である銕胤が、篤胤学を広めるための材料として、分かり易い講釈原稿を編集刊行したものが『古道大意』をはじめとする講本なのである。その刊行順も、篤胤が講釈を実施した際の題目一覧の掲載順とは一致しない。「大意もの」を考える上で、刊行者である気吹舎二代目銕胤の作為を無視することはできないのだ[4]。そして銕胤は、死ぬまで『歌道大意』を出版させなかった。同書の刊行は、本文に先立って内容に問題があることを断ってのものであり、それも明治十八年、長命な銕胤が没してから、五年も後のことである[5]。

実際、国学の師匠であれば和歌の短冊の一つや二つ、と期待しても、銕胤はなかなか応えてくれなかった。奥州相馬地方の門人である高玉安兄は銕胤に対し、篤胤の歌を短冊に認めてくれるよう求めたのだが、銕胤はこれを断り、既に貴重になった篤胤の短冊の貸し出しで対応した。さらには、このような手紙が高玉の許に届いている[6]。

> 入門之人々江亡父霊代として短冊壱葉ツヽも御所持被成度御趣意ニ候得共、兼而御断り申候事故、其段ハ御余義なく、仍而此上ハ悴延太郎ニでも代筆為致候やうニとの御事、思召之所ハ、御尤ニ候得共、是又御断申上候、但しかやうニ申候而ハ余りニ無面目ニ而御気之毒ニ御座候得共、世間の学者を見候ニ、兎角歌よミ多く、歌を詠候ものハ必学びの方麁略ニ御座候、夫故、道の行ハれ候事埒明不申候、仍而拙子ハ歌詠大きらひ、子々孫々申伝へ、歌ハ詠ませ申間敷、此外碁将棋茶の湯など一切いたさせ申間敷、と申付候事ニ有之候間、何分ニも不悪御承引可被下候、右之通りニ御座候得共、折角御入門之御方々亡父の霊代をと御望ミ被成候も実ハ御尤之事、また貴君ニも追々多勢御誘引も可被下由、然ルニ何歟なくてハと思召候も是又至極御尤

1) 浅野三平「平田篤胤の和歌」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』1（1995）は、先行研究の評価も紹介しながら篤胤の和歌を詳しく論じている。
2) 飛鳥井雅道「篤胤のエネルギー」『日本思想大系月報』36（岩波書店、1973）、1～2頁。飛鳥井雅道『日本近代精神史の研究』（京都大学学術出版会、2002）に再録。
3)「歌道大意」『新修平田篤胤全集』15（名著出版、1978）20頁。
4) 拙稿「『講本気吹颯』の弁」藤田覚編『幕藩制国家の政治構造』（吉川弘文館、2016）。
5)『明治維新と平田国学』（国立歴史民俗博物館、2004）。
6)「相馬地方における平田銕胤書簡（Ⅴ）」『國學院大學日本文化研究所紀要』100（2008）、「相馬地方における平田銕胤書簡（Ⅵ）」『國學院大學研究開発推進機構紀要』1（2009）。引用は（Ⅵ）のB91。嘉永年間か。

ニ奉存候、右ニ付御内談申候、亡父認候ものゝ内、短冊また色紙などきれいに認候ものハもはや至而払底ニ相成候間、以来一枚も差上兼候、半紙半切其外反故のうらなどへ何かの下タ書ニいたし、字三ツ四ツ或ハ歌の半分ぐらゐ又中ニハ一首まるで書候も有之候、また俗文或ハ薬方など書候ものも有之候、是等ハ随分数々有之候間、成たけ見よき所をえり出し、一葉ツゝ相送り候事ハ如何、但し亡父の名ハ無之候間、拙子のことわり書を添へ可申候、譬へハ、此———ハ亡父の筆疑ひなきもの也、某の所望ニ付相贈る　　銕胤

右やうニ相記し可申候、諸方ニも此例有之、大抵同様之御望ニ而実ニこまり申候、拙子代ニ相成り入門三四十人有之候、内過半右之通りニ御座候、弥御懇望ならバ相贈り可申候間、右之所ハ極内々貴君御腹の内へ御納メ置可被下候

紀州徳川家に仕えた国学者本居大平も、あくまでその「役」は「歌学」であった[7]。篤胤の『歌道大意』とて、詠歌の価値を否定するものではなく、「歌を詠み文を作ることを学ぶのは、古の道にわけ入るべき山口にせんとてのこと」[8]という意義を認めている。「歌詠大きらひ、子々孫々申伝へ歌ハ詠ませ申間敷」とまで言い切り、門人集団経営に当たってかくまで和歌を回避しようとする銕胤の姿勢は、まことに印象的である[9]。あるいは銕胤は、篤胤が新場の餅屋の脇で江戸っ子相手に講釈した和歌談義の如きでは、歌詠みの世界で戦うことなどできない、と割り切っていたのかもしれない。

＊

気吹舎そのものにおける和歌の評価について、筆者は長らく上述の如く認識し、そして銕胤の教えに従うに等しい状態であった。だが当然ながら幕末維新期の平田派国学者の全てが、和歌を遠ざけていたわけではない。そもそも富小路貞直[10]や六人部是香[11]のように、和歌に通じた篤胤の協力者も少なくない。その質は判断しかねるが、幕末の平田派の志士らが歌を学び、そして詠んだ記録は数多目にしてきた。ロシア軍と張り合ってサハリン支配を図った門人等が北辺の凍える夜に『万葉集』を学ぶ姿は、感動的ですらあった[12]。

これは本腰を入れて勉強しなければいけないぞ、と思ったのは、幸いにも佐賀でお仕事をいただいてからである。佐賀は六人部是香経由で平田国学が広まっており、篤胤同様、漢訳キリスト教教理書を利用した復古神道神学を編み出した南里有隣——藩主の娘の和歌の師でもあった——を輩出し、柴田花守や西川須賀雄など、歌を好んだ平田派も少なくなかった。そして、南里有隣は実は桂園派であり、彼の周辺には藩主をも含む桂園派の地方歌壇が成立していたのである。あるいは薩摩の桂園派歌人で、御歌所に入った八田知紀は、幽界に関する情報を交換するなど篤胤の影響を受けた人物なのだが、佐賀の桂園派歌人とも交流を持っていた[13]。篤胤学を——少なくとも部分的には——受容しながら、歌にも注力しており、その面では篤胤どころか宣長からも距離をとる。果たして彼らの中で歌学や国学の諸流派はいかなる関係にあったのか？

＊

かくして幕末佐賀歌壇の実態、また和歌をも詠んだ平田門人の考え方について、迫っていきたいと志すようになった。とは言え、独力でどうにかなるほど和歌史の道は甘くないに違いあるまい。そこで佐賀大学にかつてご勤務だった和歌史のプロフェッショナルや、佐賀藩の文事に通じた若手研究者に共同研究を持ちかけたところ、有難いことに皆さん優しいお返事を下さった。以上がメンバーの中でもっとも頼りない、研究代表者の立場から見た、国文学研究資料館共同研究（若手）「幕末地方歌壇の研究——佐賀藩の場合——」の申請・実施に至った経緯である。

7) 嘉永七年十一月二十五日段階での内遠の肩書きは「大御番格　歌学　本居弥四郎」。堀内信編『南紀徳川史』17（南紀徳川史刊行会、1933）119頁。
8) 前掲「歌道大意」8頁。
9) もっとも、気吹舎歌集を編んだのも彼であり、彼の短冊類も無いわけではない。時期により姿勢も異なるのだろう。佐賀大学附属図書館市場直次郎コレクションには「笛」と題して「其の名をば皇囡に著く磐笛をえたる神こそまさしわが神」と詠んだ短冊が残る（短冊135）。この笛を篤胤が愛蔵した天の石笛だと見れば、これは死後の篤胤を称えた歌になる。
10) 盛田帝子『近世雅文壇の研究』（汲古書院、2013）に詳しい。
11) 田中重太郎「六人部是香の著書・手沢本について」『相愛女子大学・相愛女子短期大学研究論集』11・12（2・1）（1965）、竹下豊「『六人部是香歌集』について」『女子大文学　国文篇』33（1982）など多数。
12) 北海道立文書館所蔵土井豊築日誌写本。
13) 拙稿「南里有隣研究の回顧と展望」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』9（2015）、拙編著『花守と介次郎』（佐賀大学地域学歴史文化研究センター、2016）、拙稿「中島広足『佐嘉日記』と野中古水」『西日本国語国文学』4（2017）などで、これまでに分かってきたところを整理・公表した。

書　評

ブックレット〈書物をひらく〉2

入口敦志著『漢字・カタカナ・ひらがな　表記の思想』

鈴木　喬（国文学研究資料館日本文学若手研究者会議委員、奈良大学非常勤講師）

日本語は、漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字と複数の字種を有する。そのため複雑な文字体系で運用する日本語の“今”がある。

そのような文字体系は、運用の面で様々なスタイルを生じさせる。つまり、選択が行われているといえる。その選択の背景となる、社会や思想をあぶりだそうというのが本書の主題である。

本書の構成は次の通りである。

一、『古今和歌集』の意義　　二、四つの『平家物語』
三、医学書の表記　　四、山鹿素行から本居宣長へ

分量から言えば、近世の古活字本などが主な研究対象である。書記史や文学史を語る場合、通常、漢字の受容期や奈良時代の『古事記』や『萬葉集』から始発する。しかし、本書は平仮名で記された墨書土器や平安時代成立の『新撰万葉集』からはじまっている。万葉仮名の説明において、『新撰万葉集』を用いるのは珍しい。また「おわりに」で正岡子規の言葉に触れてはいるが、明治期における漢字廃止論など十分に述べられていない。

本書は国文学研究資料館の歴史的典籍ＮＷ事業と連動して行われている共同研究「表記の文化科学―ひらがなとカタカナ」の成果の一部として刊行されたものである。本書のあとがきにも記されているが当初「漢字」が研究対象として抜けていたことや、また著者のこれまでの研究業績からも、本書が平仮名と片仮名が字種として確立した後の、思想的背景を考察したものと考えられる。

仮名成立期当初、平仮名と片仮名は、字種として明確な区分はなかったと考えられている。寛平七年（897）宇多天皇宸筆の『周易抄』では平仮名と片仮名混用され、同質の字種として用いられている。さらに平田篤胤の自筆書簡では、漢字に平仮名片仮名を交え記している。平仮名と片仮名の対立ではなく、漢字と仮名、平仮名漢字交じりと漢字片仮名交じりが対立している。そのため漢字の考察は不可避であるといえる。

「一、『古今和歌集』の意義」では、勅撰和歌集である『古今和歌集』が平仮名で記されることの意義を述べる。また漢文と和文との表現の違い、「漢」と「和」の対比構造について述べられている。

このような構造は奈良時代にもみられる。『古事記』の序文では、漢字で記すことによって、日本語や人の情を伝えることの難しさについて自覚的な記述がある。また漢字だけの『萬葉集』の和歌の世界であっても、万葉仮名を一切用いず漢字の表語性を生かし記す場合や、防人歌など一字一音、万葉仮名のみで記す場合、など書記様式の違いが存在する。なお『萬葉集』巻五では、一字一音様式ではあるが、漢文の序などを持つ歌が散見する。「漢」と「和」の対比がみられるのである。

本書は仮名の創出を「民族主義の時代」の潮流に位置付ける（17頁）が、奈良時代においても、そのような背景があるといえよう。また平安時代の『御堂関白日記』などのの古記録も、漢文で記しながら、和歌は仮名書きされる。平安時代に和魂漢才という考え方が生まれたのも、そのような潮流の影響といってよい。

目を引いたのは、青谿書屋本などの『土左日記』の自筆本の大きさに関わる部分である。文字ではなく、紙などの形態の異なりという書誌情報から、「漢文」と「和文」、位相の異なりを述べる（24頁）。実に興味深い指摘である。書記のスタイルの選択は、何も文字の選択に限ったことではないからだ。

「二、四つの『平家物語』」と「三、医学書の表記」では、古活字版における書記のスタイルを論じている。『平家物語』において「漢字カタカナ混じり本」とされるものを本書では「カタカナ本」と称し（27頁）、平仮名漢字交じりのものを「ひらがな本」と称している。また出版された時代において、カタカナ本より、「ひらがな本のほうがよりやさしいものとして認識されていた」（32頁）と指摘する。

用いられている「ひらがな本」とされるものは、「祇園精舎」まで仮名書きされる。そのような平仮名漢字交じり文と、少量仮名書きする漢字片仮名交じり文とを、「ひらがな本」と「カタカナ本」として読みやすさの比較をして良いかという問題がある。なぜなら前者は、主が平仮名であり、後者は主が漢字であるからだ。平仮名と片仮名の対立ではなく、平仮名と漢字の対立である。

『延寿撮要』という楷書の漢字と平仮名を用いた書物（44頁）があるのを、本書で初めて知った。改題本の『延寿養生』との比較は、指摘のとおり読者を意識したスタイルの変更であろう。江戸時代後期になると滝沢馬琴など、総振り仮名へと変容することなどとも関わる問題である。

平仮名を主とした作品の出版が始まっても、序跋文は尚も漢文で記される。それを著者は「漢文の呪縛」と表現する（62頁）。また、江戸時代に、序跋文が平仮名で記されることを「呪縛からの解放」とし、「真に庶民のものになった」とする（64頁）。呪縛の水準の差であろうが、漢文訓読体の文体は近代まで残り、また我々は字種としての漢字を廃止することができず現在にいたる。

「四、山鹿素行から本居宣長へ」では、山鹿素行、荻生徂徠、本居宣長、三者三様の「漢」と「和」の対応を指摘する。それら民族意識は、異質な外部を意識することで初めて成立する。宣長は漢詩を残していたと記憶するが、単なる漢意の排斥ではなく、和魂漢才の思想を持つ。他の序跋の在り方や、宣長に続く思想家の在り様など興味がつきない。

以上、評者の疑問を交えつつ、興味関心を書き記した。ブックレットという限られた枠組みでは、限界があり、深く掘り下げることが不可能であったのだろう。一方で、ブックレットがゆえに、成功したことがある。本書の主題が直截的に伝わることだ。日本における文字の紆余曲折とその背景を、より多くの読者に伝わったのではないだろうか。本書が広げた問題提起や多くの読者が抱いた興味関心に応える、大著が世にでることを期待する。

ブックレット〈書物をひらく〉5

恋田知子著『異界へいざなう女　絵巻・奈良絵本をひもとく』

柏原　康人（国文学研究資料館日本文学若手研究者会議委員、大手前大学学習支援センター非常勤職員）

本書は、多様に存在する絵巻・奈良絵本の世界を媒介者としての女性を軸に解き明かそうとするものである。本書の構成は以下の通りである。

はじめに

一　異界へいざなう女
洗濯する女／男が蛇になる理由／女が蛇と化すとき／変容する「道成寺の物語」／聖俗を往き来する尼／地獄から蘇った尼／姫君を救う老尼／山姥の二面性／境界の老女神／比丘尼の懺悔語り／媒介者としての尼

二　源氏物語を供養する女
源氏供養の誕生／源氏供養の儀礼と女院／「源氏表白」を享受する人々／寺院で用いられる物語草子／貴族社会での絵巻化／源氏供養を依頼する尼とはだれか／『源氏供養草子』を読む女／寺院と貴族社会のあわい

三　嫁入り道具としての奈良絵本
叢書としての奈良絵本・絵巻／同じ筆による奈良絵本／女性を救済する尼寺／版本と異なる挿絵の謎／絵師によるたくらみ／真田家伝来の奈良絵本／女性に向けた物語草子

四　尼と絵巻
無欲の聖、真盛上人／真盛の往生伝記／高僧絵伝のつくりかた／真盛上人と三条西実隆／尼寺に伝わる真盛絵伝／近世の絵巻制作／尼の物語への改編／寺を保証するための絵巻／ふたたび、媒介者としての尼

あとがき

著者は、ご自身の博士論文を基にした『仏と女の室町物語草子論』という大著を2008年に発表されている。当時、大学院に進学したばかりだった私は、図書館に配架されたそれを拝読し、中世文学、殊に室町期の文芸世界の奥深さと著者の研究の緻密さに衝撃を受けた覚えがある。本書は、『仏と女の室町　物語草子論』に代表される著者のこれまでの研究を「境界」をキーワードにして更に展開させたものである。

本書の内容は、一般向けのブックレットとは思えないほど密度の濃いものである。これは、内容が一般向けではないとか難しいとかいう意味ではない。著者の資料渉猟の成果が、精確な論証と周到な目配りによって丁寧に繙かれており、量・質ともに非常に充実しているということである。室町期の文芸世界の広がりとそこに登場すると同時に物語を媒介した女性のさまざまな姿がいきいきと描き出されており、一般読者のみならず研究者にとっても読み応えのあるものになっている。

筆者は目次を一読した段階では、本書は物語草子や絵巻に関わるさまざまな「異界へいざなう女」の姿をオムニバス式にまとめられたものかと理解していた。浅薄な知見しか持たない筆者にはそれぞれの章の繋がり、特に一章と三章の位置づけがよく分からなかったのだ。また、「異界にいざなう女」という本書のタイトルと関わるのは、第一章だけではないのかと感じたりもした。しかし、実際に読み進めると、それらはまったくの誤解であった。

本書で取り上げられる女性の姿は一様ではない。第一章では、川にたたずむ洗濯女や蛇へと変じる女、聖俗を往き来する存在として描かれる尼など、物語の中で境界性両義性をもって描かれる女性達が取り上げられている。第二章以降は、物語の内部から現実世界へと視点が展開する。寺院と貴族社会、物語と儀礼のあわいに生み出された物語草子とそれに関わる女性、物語に描かれる挿絵の変容の重要な要素になっていた女性、高僧伝を絵巻化し尼寺の正統性を主張する縁起の作成に携わった尼など、現実世界においてさまざまな「境界」にあって媒介の役割を担った女性達の姿が描き出されている。

かように本書は多くの女性に言及するが、それらはいずれも現実世界と物語の世界や聖と俗の間を往き来しつつ物語を媒介する女性であった。第一章で論じられている物語に登場する老尼、山姥、老女神は、まさしくこの世と異界の狭間にあって登場人物を異界へと接続せしめる女性である。それだけではなく、第二章以降で取り上げられる現実世界に生きる女性達もまた、物語と現実世界を接続させ、メディアを成立あるいは変容させる「媒介者」の役割を担っているという意味において「異界へいざなう女」であった。物語草子や絵巻、奈良絵本の成立と展開の随所に女性が見え隠れし、「媒介者」として重要なファクターになっていたのだ。

筆者の興味を特に引いたのは、第三章と第四章である。第三章では、「女性」、「嫁入り」という要素が、絵巻や奈良絵本を時代を超えて変容せしめるさまを具体例を挙げながら論じられている。第四章では、もとは往生伝や祖師伝としてあった真盛上人の伝記が、絵巻化され、さらに尼僧たちによって尼寺の正統性を主張し担保するものへと変容していくことが指摘されている。

いずれも中世から近世に至るテクストの享受者による書物や物語の性質の変容と展開を具体例をもってあとづけたもので、中世・近世文芸の通時的な研究に大いに資するものであろう。特に、四章で明らかにされた高僧の伝記の絵巻化、さらに女性を中核とした寺院縁起への変容の様態は、寺院に伝存する縁起をはじめとしたテクスト群の成立や由来などを研究していく上で示唆的である。

また、本書では歴史の流れの中である物語が女性という要素によって融通無碍に姿を変えていく様が活写されており、一般読者にとっていわゆる教科書的な文学史とは異なる「文学史」への扉になるものと考える。「女性」、「境界」という目を通して物語草子の展開を見渡すことは、物語草子の豊穣なる世界だけではなく、年代順に作品名を羅列したり作者やキーワードで枠にはめただけの記号化された文学史からは想像もつかない豊かな文学の世界へと読み手をいざなってくれることだろう。著者があとがきにおいて希求するように、本書はまぎれもなく読者を「想像力あふれる楽しい物語草子の世界」へといざなう媒介としての役割を果たすものであると言えるだろう。

以上、蕪雑な言辞を弄した。若輩故に評に誤読、誤解もあろうかと思う。著者と読者の御寛恕を願うとともに、本書が一人でも多くの読者にとって確かに媒介の役割を果たすことを願ってやまない。

トピックス

「ないじぇる芸術共創ラボ　NIJL Arts Initiative」について

前号の『国文研ニューズ』No.49の「日本文学資源の発掘・活用プロジェクト始動」でもお伝えした新事業が、名称を「ないじぇる芸術共創ラボ－アートと翻訳による日本文学探索イニシアティブ」（英語名称：NIJL Arts Initiative:Innovation through the Legacy of Japanese Literature）として本格的に始動しました。今回、本事業のロゴマークも作成しました（標題右図）。なお、「ないじぇる芸術共創ラボ」のロゴは、「古典の森」をイメージしたものです。古典の森を分け入り、そこから様々な宝物を発掘してゆく、という意味が込められています。また、描かれた三本の木は、それぞれAIR･TIR･古典インタプリタという、当事業の三本の柱を象徴するもので、ロゴに使用した文字は、井原西鶴『好色一代男』の版本から抽出したものです。文化庁が推進する日本文化の国内外への発信に関する取り組みの一環であり、古典籍を発掘し、社会還元や新たな創造につなげることを目的として、文化庁と国文学研究資料館との共催により実施するのが、「ないじぇる芸術共創ラボ」です。

「ないじぇる芸術共創ラボ」は、三本の柱から実施してゆきます。

一本目の柱は、アーティスト・イン・レジデンス（AIR）です。様々な分野で活躍するアーティストを招聘し、当館を拠点として、当館に蓄積された資料や研究成果を活用した作品を発表してもらおうという企画です。AIRには、三人のアーティスト、作家の川上弘美氏、アニメーション作家の山村浩二氏、劇作家・演出家・俳優の長塚圭史氏をお招きしました。川上氏には、伊勢物語をモチーフとした短編小説「ignis」（『なめらかで熱くて甘苦しくて』〈新潮社、2013〉所収）があり、その後、『日本文学全集03』（河出書房新社、2016）では伊勢物語の現代語訳を発表しています。山村氏は代表作に、アカデミー賞短編アニメーション部門に正式ノミネートもされた『頭山』などがあります。イラストレータとしても活躍し、最新刊に泉鏡花「月夜遊女の巻」に挿絵を描いた『絵草紙月夜遊女』（平凡社、2017）や、古事記の全神々を描いた『絵物語 古事記』（偕成社、2017）があります。長塚氏は多彩な活躍を展開し、自身で戯曲を書くだけではなく、海外・日本の近代古典戯曲の演出にも精力的に取り組んでいます。

「ないじぇる芸術共創ラボ」の二本目の柱となるのが、トランスレータ・イン・レジデンス（TIR）です。日本文学には、海外に未紹介のすぐれた作品がたくさんあります。外国語に翻訳された作品の多くは、日本国内で翻刻され、注釈や現代語訳が備わったものの中から選ばれています。そこで翻訳家を招聘し、未翻字・未翻刻のテキストを含め、翻訳作品を選定して海外に紹介するという取り組みです。TIRには、ピーター・マクミラン氏をお招きしました。マクミラン氏はアイルランド生まれで、日本在住歴は30年に及びます。2008年に小倉百人一首の英訳『One Hundred Poets,One Poem Each』をコロンビア大学出版局から、2016年には伊勢物語の英訳『The Tales of Ise』をペンギンクラシックスより刊行しました。

そして今後、AIR・TIRの活動を支えるのが、三本目の柱である古典インタプリタです。古典籍や国文学研究に関する専門的な知識や知見を活用し、AIR･TIRをサポート･ナビゲートする役割です。古典インタプリタには、有澤知世特任助教があたります。有澤特任助教は、近世文学を専攻とし、2017年3月に大阪大学から博士号を授与されたばかりの若手研究者です。AIR・TIRのサポートだけではなく、当館の企画広報全般に関わることで、古典文学研究と社会との架け橋となるよう、業務を担当します。

2017年10月18日（水）、文化庁情報ひろばにて、関係者が一同に会し、新事業の記者発表を行いました。事業説明の後、キャンベル館長がロゴの説明、参加アーティスト・トランスレータ、古典インタプリタを紹介しました。その後、キャンベル館長と、AIRの山村氏・長塚氏（川上氏は欠席）、TIRのマクミラン氏、古典インタプリタの有澤特任助教によるトークセッションを催し、古典文学・古典籍の魅力について語り合いました。各社記者の方々の本事業に対する様々な質問にお答えし、記者発表は終了しました。

今後、様々な発表やイベントを行っていきます。新事業にどうぞご期待下さい。

（小山　順子）

第 10 回日本古典文学学術賞受賞者発表

「日本古典文学学術賞」は、財団法人日本古典文学会が主催していた「日本古典文学会賞」を継承し、若手日本古典文学研究者の奨励と援助を目的として、国文学研究資料館賛助会に設置されました。2017年で第10回を迎えます。

受賞対象者は、対象となる業績の公表時に40歳未満である研究者です（３名以内）。

今回は静岡大学の高野奈未准教授と北九州市立大学の渡瀬淳子准教授のお二人が受賞され、授賞式は10月20日（金）にパレスホテル立川（立川市曙町）で開催されました。

◆選考委員◆

堀川　貴司（中世文学会／慶應義塾大学教授）
木越　治（日本近世文学会／金沢大学名誉教授）
中川　博夫（和歌文学会／鶴見大学教授）
室城　秀之（中古文学会／白百合女子大学教授）
藏中　しのぶ（上代文学会／大東文化大学教授）
小林　健二（国文学研究資料館賛助会運営委員会委員長／同館副館長）
入口　敦志（国文学研究資料館准教授）

◆過去の受賞者◆

第1回	平成20年度	沖本　幸子／北村　昌幸
第2回	平成21年度	岡崎　真紀子／恋田　知子
第3回	平成22年度	久保木　秀夫／水谷　隆之
第4回	平成23年度	金　時徳
第5回	平成24年度	平野　多恵
第6回	平成25年度	一戸　渉／光延　真哉
第7回	平成26年度	木越　俊介
第8回	平成27年度	合山　林太郎
第9回	平成28年度	木下　華子／牧　藍子／小財　陽平

左から　室城委員、木越委員、中川委員、堀川委員長、高野氏、渡瀬氏、キャンベル館長、谷川副館長、小林委員、入口委員

第 10 回日本古典文学学術賞選考講評

高野奈未氏『賀茂真淵の研究』（青簡舎、2016年２月刊、Ａ５版278頁、本体9,000円）

賀茂真淵の歌業や古典注釈を主対象に考察する。多数･多層の門人を輩出し、後世に多大な影響を与え、「包容力」に富んだ思想を抱えた真淵自身の研究を停滞させる要因が、「著作･指導の記述」が個別的･非体系的でそれ故に「曖昧」であるからとの認識に立ち、その「内実を具体的に把握し、真淵の意図を追究することが、近世国学・和歌における真淵の活動の意義を明確にするために必要」という問題意識に基きまとめられた書である。

「第一章　真淵の歌学と和歌」「第一節　真淵の当代和歌批判―和歌指導に即して―」。真淵の、「いひつめ」る傾向の当代和歌批判に、堂上歌壇との共通性や漢学との等質性を見て取り、門人の多さや唐突に映る真淵の上代志向の要因を析出する。「第二節　真淵の長歌復興」。真淵の長歌重視は、当代短歌や漢学という批判対象を意識した和歌観の表れで、和歌史上の画期だと捉える。共に作品に即した立論で説得力に富む。「第三節　真淵の題詠観」。当代題詠の弊害是正のための題詠批判と解決法は、当代和歌退嬰の原因を抉り出し意義が大きいと言う。前代の題詠に関する言説の見渡しが望まれ、さらなる追究を期待したい。「第四節　真淵の万葉調」。当代に批判され近代に称賛された真淵の万葉調和歌の実態を考察する。「鷲」詠は、真淵の上代志向確立の過程に位置付けられ、万葉調の基盤を指摘し得ると言う。真淵の主張の実践を問う論としての意味は大きい。前代までの詠作方法との関連の追究や新古今調の詠作からの変化の解明が俟たれる。

「第二章　真淵の古典注釈学」「第一節　真淵の初期活動―『百人一首』注釈を中心に―」。真淵の通説の形成基盤や季吟説を踏まえる方法を検証する。初期活動の王朝重視と晩年の上代重視の矛盾の自覚から、『うひまなび』を著して旧説を打ち消そうとしたと見つつ、変遷する注釈中の連続性に真淵が追求した「なほきいにしへの心」が鮮明に浮かび上がると言う。結論にやや飛躍があるが、論証過程は堅実かつ明快で評価されてよい。「第二節

『伊勢物語古意』考」。改稿が繰り返された『伊勢物語古意』につき、中古文学の性質を自身の歌学に照らして是非を検討する、上代文学志向に至る過渡期の姿を描き出す。論述は明晰だがやや図式的でもあり、良くも悪くも著者の特徴が出た論攷である。「第三節　『源氏物語新釈』考」。『源氏物語新釈』につき、先行説を利用しつつ理想とする古代の要素を強調する注釈方法を確立し、それに従って『源氏』を理解していたと説く。前二者と一貫した論理で、真淵の注釈姿勢を分かり易く剔抉している点が評価される。

「第三章　真淵学の淵源」「第一節　卑下と好色―小野小町「みるめなき」の歌の解釈をめぐって―」「第二節　倫理と道理―『伊勢物語』二十三段における業平像の変遷―」。注釈史上に揺れがある作品につき、史的変遷を辿りながら、真淵注釈を古典注釈学史に位置付ける。丁寧に穏当に学説史を辿っている。結語が、魅力的な論題に見合わない感は残るが、曲折し矛盾を孕む解釈の微妙な差異を解明した点を評価したい。

「第四章　真淵学の継承と実践」「第一節　鵜殿余野子『月なみ消息』考」。『月なみ消息』は、県門歌人として女性の望ましい教養・表現・行動を以てする「消息」の表しであり、「理想としての古代」を実現する一方法として位置付け得ると言う。納得される見解である。「第二節　宣長・秋成の「日の神」論争」。『呵刈葭』にまとめられた宣長と秋成の論争を丁寧に読み解くが、この論が本書に組み込まれる必然性は薄い。

総じて文学史・和歌史上に巨細・軽重ある対象を取捨選択しながら、各作品本文の読みを通じて真淵に迫ろうとする意欲が認められる。小野小町や在原業平、『伊勢物語』や『源氏物語』あるいは『百人一首』といった文学史・和歌史上の枢要と真淵との交点を巧みに掬い上げた論攷で組まれた行き届いた本書の構成は、価値判断に優れ、真淵の業績の骨組みをよく照らし出す。万葉主義や国粋主義や復古思想といった主義・思想の枠組みを前面に出さずに、作品の読解を通じて真淵を把握しようと努めている点が共感される。やや図式に傾く嫌いなしとはしないが、専門家以外にも理解できる平易で明快な行論で、飾りのない文体であることも好もしい印象である。なお、「上代」「古代」、「文学」「文芸」等の語彙の不統一や定義の揺れが残り、史的把握に於いて前代の見渡に不十分な場合があった。

最後に今後の研究の方向性を示して欲しかったが、それは高野氏が行くべき道次第であろう。真淵自体を総合的に究明せんとする道か、近世和歌史や注釈学史を構築せんとする道か、その両者かまた別の道か。いずれにせよ高野氏ご自身のお考えで進まれるであろうその道が、近世文学ひいては日本古典文学の研究をより豊かなものにすることを十分に期待させるに足る本書が、堅実で誠実な研究の成果であることは疑いない。このことを高く評価し、選考委員会は全員一致で、高野奈未氏を日本古典文学学術賞の受賞者に決定した。（文責　中川　博夫）

渡瀬淳子氏『室町の知的基盤と言説形成 仮名本『曾我物語』とその周辺』（勉誠出版、2016年６月刊、Ａ５版380頁、本体10,000円）

日本の中世、特に室町時代の文芸は、作品が小粒だとか、主題が画一的で深みがないとか、雑然としていて統一性に欠けるとか、とかく低い評価がなされてきた。本書は、このステレオタイプの評価に対して、一見雑多で寄せ集め的な室町文芸の背景に、実は正統的な古典の枠には収まり切らない豊穣な「知」の世界があることに迫った研究である。著者の渡瀬氏は、この室町期の文化現象を解明するため、四つの部立から問題を論じる。

第一部「曾我物語をめぐる文化圏」では、仮名本『曾我物語』を取り上げ、仮名本を正確に読むには、まずそれが拠って立つ文化基盤を理解しなければならないとして、仮名本を飾る要素の一つ一つを分析し、「連想」や「類型」を手懸かりに物語の外部にあるコンテキストに大きく依存した物語作りについて考察する。本書の核となるもので、仮名本『曾我物語』は長編物語としての一貫性を欠く支離滅裂なテキストという、低い評価に甘んじてきたが、そもそも『曾我物語』に長編小説として首尾一貫した構成のもとに人物造型を行うつもりなどなく、あくまでも個別具体的な断片的挿話の積み重なりで織りなされた物語であると説く論証は力強く、その見解は首肯できる。しかし、その一方で有象無象の「知」が吸い寄せられ、その集積所となった『曾我物語』の磁場として力を読み解いていくこともまた必要であり、今後期待したいところである。

第二部「太刀伝承をめぐる文化圏」は、「剣巻」を中心に軍記物語に広く見られる刀剣に関する伝承に光をあてて、中世の基礎教養の一つであったことを検討したもの。刀剣伝承の形成や変容の過程を概括するに止まらず、その伝承が刀剣にまつわる歴史を書き換え、新たな歴史を作り上げていることを考察した上で、源氏の礼讃を目的とする伝承であったとするこれまでの考えを、目的ではなくむしろ結果であったとする説は刺激的である。

第三部「和漢の知」は、中世に入って大陸との人や文物の交流が活性化したことにより、漢文の享受にも質的な変化が起きたことを踏まえ、それが日本にどのように受け入れられ、影響を与えたかを論究する。中世に形成された土蜘蛛に中華風のイメージが付与されていくことや、仮名本『曾我物語』の記事を端緒に熱田の楊貴妃伝説の広がりと影響を追い、また、同じく仮名本にとられる韓憑故事が、古典の注釈、また唱導や直談という語りの場で変容していく様相を広汎に追っており、氏の視野の広さをうかがうことが出来る成果である。

第四部「言語表象と知的基盤」は、言葉の裏にある背景を探ることにより、その言葉を生み出し用いている文化的基盤に迫ったもの。中世「擬」仏教語、「松の柱」に注目した「ぼろ家」の定型句、『源氏物語』の「くだものいそぎ」、『熊野千句』の「とけそはる」を取り上げ、言葉を取り巻くイメージから新たな読みをはかったもので、渡瀬氏の言語に対する感性がうかがわれる研究となっている。

以上、これら四部の考察は、一見バラバラなようであるが、室町期の物語や言語の奥にあるコンテキストを探

るという方向で一致しており、正統的古典知とは異なる、もっと卑属で雑多な知が織りなす教養世界の豊かさを炙り出すことに成功しているといえよう。

「室町の知的基盤」とタイトルにうたいながら、その基盤の定義が曖昧であるとか、正統的なものとそうでない古典知との境界が明確でないなどの意見も呈されたが、室町期の混沌とした文芸世界を縦横に駆け巡り、その通底にひしめく言説の断片を紡ぎ合わせて、室町期文芸の特質に光をあてた渡瀬氏の研究成果は大いに評価できるものであり、審査委員会は全員一致で、日本古典文学学術賞の受賞者に決定した次第である。（文責　小林　健二）

バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書群の調査と活用
ローマでのくずし字講座と講演会の開催について

2017年10月24日から31日にかけて、バチカン図書館所蔵マレガ神父収集文書群の調査がおこなわれました。同図書館での調査は、2013年9月の第1回調査以来、第8回となります。今回、マレガ文書合計約1万4千点の概要調査を、ほぼ完了することができました。これを受けて、プロジェクトの基盤的な活動は、資料の修復、デジタル画像・資料目録の作成、そして画像データベースの作成・公開へとその比重を移すことになります。同時に、マレガ文書の内容や可能性を、国内はもとより資料が所在するヨーロッパに向けてもアピールし、さまざまな活用の可能性を広げていくことも、重要な課題となります。

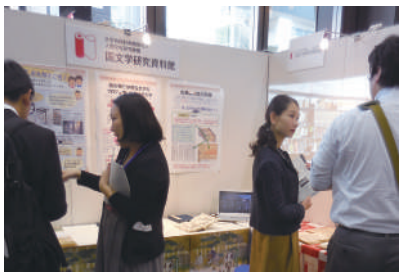
こうした課題に取り組むため、今回の調査期間には、二つのイベントを開催しました。一つは、2017年10月27・28日、ローマ大学などとの共催による、マレガ・プロジェクト　ワークショップ3「くずし字解読を学ぶ－バチカン図書館所蔵マレガ文書の世界－」です。プロジェクトのワークショップとしては第3回、くずし字講座としては、2017年2月に続く第2回の講座となります。講座は、プロジェクト代表大友一雄(国文学研究資料館)の趣旨説明と、太田尚宏(国文学研究資料館)「日本古文書とくずし字解読」、宮間純一(国文学研究資料館)「切支丹末裔の出生・結婚と文書システム」、櫻井成昭(大分県立先哲史料館)「寺院の役割と切支丹末裔の死」の三つの講義、参加者がプロジェクトメンバーと一緒に古文書を解読するグループワークから構成されています。ローマ大学の大学院生・教員を中心に、ナポリ東洋大学・サレント大学・カターニャ大学など多くの大学から参加者があり、熱心に講義を受講し、古文書解読に取り組んでいました。グループワークははじめての試みでしたが、イタリアの学生の日本語能力の高さと、熱心に学ぶ姿勢に感心すると同時に、海外に所在する日本史料の、現地での活用の可能性を感じることもできました。

10月26日には、ローマ日本文化会館・バチカン図書館との共催による講演会「日本とバチカンの過去から未来をつなぐマレガ文書の世界」を開催しました。この会は、マレガ文書を通じた日本とイタリア・バチカンとの関わりをイタリアの人々に伝える試みとして企画され、バチカン図書館チェーザレ・パシーニ館長の開会挨拶、中村芳夫駐バチカン日本国大使の祝辞に続き、大友一雄「バチカン図書館で発見された日本の禁教文書とその魅力」、シルヴィオ・ヴィータ(京都外国語大学)「マリオ・マレガ神父が見た日本－戦間期の布教と歴史研究－」、アンヘラ・ヌーニェス＝ガイタン(バチカン図書館)「バチカン図書館でのマレガ・プロジェクト－相互理解と協業の体験－」の三つの報告が行われました。大友報告は、マレガ文書の主たる作成者である臼杵藩宗門方とキリシタン統制の仕組みについて、マレガ文書の写真を用いて紹介し、ヴィータ報告はマレガ神父の生涯を振り返りながら、マレガ神父の研究の意義や関心の所在を、マレガ神父が描いた絵巻や写真などを用いて興味深く解説しました。アンヘラ報告は、バチカン図書館がマレガ文書を受け入れ、それが再発見され、日本側の研究者とともに整理してきたこれまでの経緯を、修復・保存と、日本とバチカンとの相互理解と協業の体験として報告するものでした。三報告を通じて、文書が発生した江戸時代、マレガ神父が収集・研究した1900年代、再発見され整理・保存・公開を目指している現在と、三つの時代にわたる、日本とイタリア・バチカンとの関係をたどることができました。講演会には約100人の聴衆が熱心に耳を傾け、活発な質疑応答がなされました。

以上は、東芝国際交流財団の助成、在バチカン日本大使館の後援を受けて「日本バチカン国交樹立７５周年」記念事業の一つとして開催されました。事業主体は科学研究費「バチカン図書館所蔵豊後切支丹資料の国際的情報資源化に関する海外学術調査研究」および人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用」となります。（三野　行徳）

大学共同利用機関シンポジウム 2017「研究者に会いに行こう！―大学共同利用機関博覧会―」

10月8日（日）、大学共同利用機関シンポジウム2017「研究者に会いに行こう！」が、アキバ・スクエア（秋葉原ＵＤＸ ２Ｆ）において開催されました。このイベントは、大学共同利用機関のミッションを具体的な研究内容を通して分かりやすく紹介するために開催されたものです。8度目となる本年は、25の研究法人・機関によって研究者トーク及びブース展示が行われ、多くの来場者で賑わいました。



当館からは、小山順子准教授が「昔の本を見る・知る・楽しむ」と題して研究者トークを行いました。百人一首などで姿が描かれることの多い歌人・在原業平が着ている装束の文様には必ず共通点があること、それはどこから来ているのか、そして現代にどのように伝わっているのかという趣旨のお話で、何気ない身近な事柄のルーツが古典にあることを分かりやすく示され、会場の皆様は時折頷きながら興味深そうに聴き入っておられました。

また当館の設置したブースでは、研究部の教員3名と管理部スタッフ2名が、来場者との交流にあたりました。歴史的典籍ＮＷ事業の成果報告やバチカン図書館所蔵文書の整理事業などについてパネルで紹介したほか、当館所蔵の古典籍を展示し、実際に触れていただくコーナーを設けました。特に、寿司屋や蕎麦屋の看板を題材にした「くずし字クイズ」は、来場者との交流を深める良いきっかけとなり、古典籍を捲る方々から「これは何て読むの？」「漢字と仮名と片仮名が混じっているね」と、多くのご質問やご感想をいただくことができました。中には「家に古い資料があるのですが、どのように読めば良いでしょう」「板本のレイアウトがとても斬新に感じられる」といったお声もあり、来場者の様々なご関心の在り方に触れることができたのも嬉しいことでした。

（有澤　知世）

平成 29 年度「古典の日」講演会

平成29年11月3日（金・祝）、千代田区のイイノホールにおいて、国文学研究資料館主催の「古典の日」講演会が行われました。「古典の日」は、日本の代表的な古典である源氏物語の成立に関して、文献上確認できる最古の日付が寛弘5年（1008）11月1日とあることから、この日に定められました。当館でも古典に親しむという趣旨に賛同し、「古典の日」近接の休日に記念の講演会を催してきました。

今年度は、特別展示「伊勢物語のかがやき―鉄心斎文庫の世界―」の開催にあわせて、伊勢物語研究の大家である山本登朗氏（関西大学教授・当館客員教授）と近年伊勢物語の翻訳を手掛けた翻訳家のピーター Ｊ マクミラン氏を講師に迎え、会場は約400名の聴衆で埋め尽くされました。ロバート キャンベル館長の挨拶にはじまり、まずはマクミラン氏より「伊勢物語を英訳すること―その挑戦と醍醐味―」という題でお話がありました。マクミラン氏は「美学」「恋愛百景」「在原業平」をキーワードに、伊勢物語の名場面を英訳とともに紹介し、その魅力や広がりについて説明してゆきます。和歌を吟じたり、聴衆に質問を投げかけて多様な回答を引き出したりしながら、会場を大いに沸かし、翻訳の難しさや面白さを存分に語ってくださいました。次いで、山本氏が「伊勢物語と平安貴族の生活」という題でお話されました。伊勢物語のなかの「宮仕へ」の語に注目し、「束縛」「情熱」「憂愁」の観点から物語を読み解いてゆきます。伊勢物語は平安貴族の満たされない思いに共感できる物語であるとし、後世の歌人がその「憂愁」を追体験していたことも示されました。伊勢物語という作品の奥深さに引き込まれ、その余韻に浸りながら、今年度も盛況のうちに閉会しました。

ピーター Ｊ マクミラン 氏

山本　登朗 教授

なお、来年度の「古典の日」講演会は、11月3日（土・祝）に開催する予定です。今後もより多くの方々を魅力あふれる古典の世界にご招待したいと考えています。

（恋田　知子）

第 41 回国際日本文学研究集会

《越境》とは何か。ここ数十年、研究には国の垣根を越える（国際的）、学問の垣根を越える（学際的）必要性が説かれ続け、今日では喫緊の課題となっています。今回で41回を数える国際日本文学研究集会は、この《越境》が意識的に問われ続けている場ではないか、と参加して感じました。

多和田氏とキャンベル館長による対談

平成29年11月11日（土）12日（日）、国文学研究資料館において開催された国際日本文学研究集会では、研究発表9名、ショートセッション発表2名、ポスターセッション発表4名の、国内外の研究者15名による発表、そして初日には多和田葉子氏とロバート キャンベル館長との対談が行われました。国内外から両日で延べ160名の参加者があったとのことです。

まず、研究集会の始まりを告げる館長の挨拶からして刺激的でした。「国際」とは何か、「国際」の言葉自体がもう金属疲労を起こしているのではないか、研究集会を開く必要があるのか、などなど。しかし、世界各地における自国主義の台頭、そうした時の国際性の大切さ、また歴代の参加者が世界で活躍していることから、国文学研究資料館において「国際」を問い続けることは重要なのだ、という宣言のもと研究集会は始まります。

会場の様子

そういった問題意識のもと各セッションを聞いていると、この研究集会には国際性の多様なあり方が見えてきます。外国人研究者では、海外の理論・思想との関係を論じたCAPPONCELLI Luca 氏、ROEMER Maria 氏、MANIERI Antonio 氏、滕夢溦氏や、翻訳の問題を取り上げたKÁROLYI Orsolya 氏らの問題意識は、文学作品における国際の問題を直接扱うもので、ある研究発表の質疑応答では「作品に海外の理論を応用するから国際なのか、国際的問題を内容として取り扱うから国際なのか。国際とは何なのかを考えさせられる」という発言もありました。また、研究方法の共有という点では、実証的研究方法に特化して行われた発表として、張硯君氏、金美京氏、陳夢陽氏、McGEE Dylan氏、廖秀娟氏らの発表がありました。もちろん、板坂則子氏が2日間最後の総括で講評されたように、すべての発表において厳しい実証性を目指したことが共通しています。しかし、日本語を母語としない研究者にとって、それがたいへんな努力の積み重ねの結果であることは忘れてはならないと改めて感じました。

さて、総括で板坂氏は文学研究には専門性の高さを目指すとともに、研究を開くことも必要だと言及されました。研究集会の専門性の高さを保証するのが研究発表だとすると、それら研究を開いていくのが多和田葉子氏と館長とによる対談「「蛸、出て来い。」ついそちらへ歩いて行ってしまう人々の物語」だったと思います。この対談は、多和田氏の最近の著作『雲をつかむ話』『献灯使』『百年の散歩』を中心に、話題は文フェス、創作の裏側、コラージュ、アイデンティティ、人称、汎他人の社会など多岐にわたりましたが、その一貫するテーマは《越境》だったと思います。館長のTwitterによれば雑誌『新潮』に来春掲載予定とのことですので、詳細はそちらに譲りますが、冒頭だけ紹介してみます。館長からの「遠いところを立川にようこそ」の一言から、多和田氏が「国立で育ったので全然遠くないですよ、国立から立川へ《越境》ですね」という返し、それに対して会場が笑うという和やかな雰囲気から始まりました。続けて、多和田氏が那須で過ごしたあと、そこで聞いた蝉の声がベルリンに帰ってまで聞こえる、それもミンミンという擬音がさらに漢字に変化し、想像が膨らむというエピソードをお話になり、加えて、「ベルリン」の地名も東京で聞くと「リンリン」と鈴のように軽く、ドイツで聞くと「ベルリン」の「ベ」が「ベア＝熊」の重々しく感じる違いがあると発言されると、館長が「北海道では熊よけに鈴を持ちますね」と応えます。まるで作品名のような「雲をつかむ話」から始まったわけですが、後半における、文学の言語は書き出すと自己を分解し広げてしまうという多和田氏の発言と考え合わせると、境を超えていくものとして文学の言語（言葉遊びも含めて）があることを冒頭から示されていたように思います。

こういった《越境》が意識的に問われ続けている場に参加できたことは、私にとって刺激的な実感を得る体験だったように感じます。　（国文学研究資料館日本文学若手研究者会議議長 / 國學院大學兼任講師　荒木　優也）

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○中間報告論文研究発表会の開催

毎年度開催している中間報告論文研究発表会を11月21日(火) に開催しました。今年度は在学生3名に加え、研究生も発表を行いました。

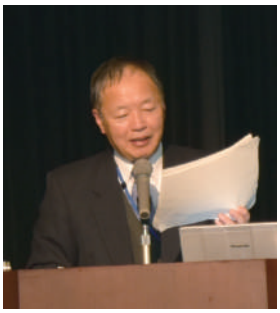
古明地　樹 氏
「『絵本通宝志』にみる橘守国の粉本観
ー巻五上「太公望」図を中心にー」

花上　和広 氏
「藤原師通の和歌について」

小野　光絵 氏
「中井英夫『光のアダム』論」

陳　坤 氏
「和漢における幼学書の比較―『蒙求』と
蕭良有の『四字経』をめぐって」

○総研大文化フォーラム2017の開催



毎年度、文化科学研究科主催で行われている総研大文化フォーラムが、12月2日(土)・3日(日) の2日間にわたり、日本歴史研究専攻の基盤機関である国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市) で開催されました。

今年は、フォーラムのテーマである「文化を〈はかる〉 ―文化科学へのまなざし―」に合わせたシンポジウム「文化と知を「はかる」「つなげる」 ―総合資料学という試み―」や、博物館展示のバックヤードを紹介する歴博ツアーなど、会場である国立歴史民俗博物館が行っている研究の成果を活かした企画も実施されました。

当専攻からの発表者は次のとおりです。

＜口頭発表＞

古明地　樹 (院生)「『絵本通宝志』にみる橘守国の粉本観」

花上　和広 (院生)「藤原師通の和歌」

＜ポスター発表＞

相田　満 (准教授)「―植物の供養と奇跡―：日本人の供養観・慰霊観：生き物供養・何でも供養の観点から」

青田　寿美 (准教授)「蔵書印データベース (+α) で拓くデジタル人文学の未来」

閲覧室カレンダー　2018年2月～2018年4月

■青は休館日　■黄色は土曜開館日

2月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28			

3月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

4月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

●開館 :9:30～18:00　●請求受付 :9:30～12:00,13:00～17:00　●複写受付 :9:30～16:00

ただし、土曜開館日は、

●開館 :9:30～17:00　●請求受付 :9:30～12:00,13:00～16:00　●複写受付 :9:30～15:00

展示スケジュール（2月～4月）

通常展示　「和書のさまざま」

会期　2018年1月15日（月）～5月26日（土）

※休室日

日曜･祝日､展示室整備日（2月14日､3月14日、31日、4月11日、5月9日）

大学支援「国文研でゼミを」 大学教員の皆様へ

学部・大学院で行っているゼミや講義を国文学研究資料館で行いませんか。豊富な所蔵資料を手に取りながら、ゼミ等を行うことができます。

◆詳細は当館 WEB ページをご覧ください。

http://www.nijl.ac.jp/pages/event/seminar/univ/shien.html

表紙絵資料紹介

武蔵国多摩郡連光寺村富沢家文書「諸用扣（留）」

今年も入学試験のシーズンがやってきた。表紙の写真は、平成26年（2014）度に実施された入学者選抜大学入試センター試験の「日本史Ｂ」で試験問題に採用された当館所蔵の武蔵国多摩郡連光寺村富沢家文書「諸用扣（留）」（請求番号：30J/1504）の図版を、ほぼ同じ構図で再現したものである。

富沢家は、歴代にわたり蓮光寺村（明治の市町村制以降は連光寺村、東京都多摩市）の名主を務め、近代以降は神奈川県会議員を、また村内に宮内省御猟場が設けられたことから宮内省御用掛も務めてきた家である。当館には、富沢家旧蔵の歴史アーカイブズが約9700件保存され、閲覧利用に供せられている。「諸用扣（留）」28冊としてまとめられた帳簿は、文化～安政期（1804～60）の当主であった富沢忠右衛門昌徳（後に魯平と改名）が村内外の行政や家の経営に関するさまざまな案件を書き留めたもので、掲出したのは、文政９年（1826）「諸向懸合事其外用留」、同13年「諸向掛合事用留」、天保４年（1833）「年中諸向用留」、同７年「公私用留」の４冊である。

上述の試験問題は、康史と史絵という２人の会話形式で展開されている。このなかには「歴史的な文書には、アーカイブズや記録史料という呼称もあるようよ。戦後に都市化が進み、産業構造が変化していくなかで、近世の文書は散逸が進み、近代の記録史料は保存の態勢が整わずに廃棄されてしまっていたの。そこで各地に資料館（史料館）や文書館などがつくられ、自治体の公文書も含めて保管されるようになったのよ」という一節もある。確認はとっていないが、「アーカイブズ」という言葉や文書保存の歴史が試験問題に登場したのは、おそらくこれが初めてだったのではなかろうか。　（太田　尚宏）

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8606

発行日　平成30年（2018）1月24日
編　集　国文学研究資料館企画広報室
印刷所　睦美マイクロ株式会社
ⓒ人間文化研究機構国文学研究資料館

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。